
シゴガク-Dead After School-

宇井崎 葉音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シゴガク - Dead After School -

【Nコード】

N1025Q

【作者名】

宇井崎 葉音

【あらすじ】

死後の世界。若者たちの救済所であるその世界に迷い込んだ少女たちは不幸な人生を受け入れることができずにいた。そんな中、一人の少年が現れたことによって、変革が訪れる……

EPISODE 01・Boy Meets Girl

「は!?!」

目を開くと一面の青空が広がっていた。

すがすがしいまでの快晴の青空を見ながら、俺は何をしていたのだろうかと思いつつとした。

「つつ!?!」

その時鋭い頭痛が走った。いくつかの不鮮明な映像が脳内を過ぎていくが、何の映像なのかわからない。

(思い出せない?)

何も、記憶らしきものがない。

青空の下で寝ていた理由どころか、自分が誰で、どこ出身で、何歳で、親は誰で、友達是谁で、などまったくというほど自分の情報が思い出せなかった。

(どうしたんだ? 一体?)

世にいう記憶喪失っていうものだろうか?

(ちょっとかつこいいだろう?)

アホか、俺は。何一人寝転んでポーズを決めているんだ。

嘆息しながらようやく上半身を起こして、周りを見る。

驚くほど自然豊かなところだった。足元は芝で、周りは緑に溢れていた。

手入れをされた花壇が備えられて、畑のようなものもあった。

当然のようにここがどこなのかも記憶していない。

（なんなんだ？一体）

とりあえず次に自分の服に何かないか探してみた。

袖を見て、どうやら学ランみたいだとわかった。つまり俺は学生なのか。

（財布に手帳だけか）

内ポケットに唯一入っていた二つを芝生の上に置き、にらめっこする。

手帳はどうやら学生手帳のようなものらしいのだが、校章もまた、学校名も書いて無く、ただ前半の文字が糊をつけたものをはがしたように剥げた「学園」としか書いてなかった。

（これは、学生手帳として成り立つのか？）

しみじみ思うが、自分がそうしたのだと思うといやなので意識から除外。

続いて財布をしてみる。

中身は一枚のカードしかなかった。

（小銭もないのか？俺は経済力に恵まれてなかったのか。あるいはこれがクレジットカードなのか）

どっちにしろわかることは、俺の持ち物じゃ今のところ自分自身のことを示してそうなのは生徒手帳だけということだ。

手帳を手に取り、それを開いた。

手帳の始め、そこには顔写真付きの生徒証明書が挟んであった。

黒髪の男がそこには映っていた。

その下に、名前がある。

『旋風 律也』

ファーストインプレッション。

かっこよすぎね？その名前。

まあ、これが俺なのかどうかわからないので、どっかに鏡はないかと探したが、周り自然オンリー。遠くに建物はあるが、俺の顔を写すものは何もない。

（このカードが鏡のような役割を……、果たしてくれないかな）

とにかく今は旋風律也と名乗っておくか。

というかポジティブだな、俺よ。

何にしてもこんなところにおいても仕方ない。俺は立ち上がり歩み

だした。

しばらく行くと植物園にたどり着いた。

ビニールハウスがたくさんあり、足元に煉瓦で作られた花壇もあった。そこは何かわからないきれいな黄色い花が沢山植えられていた。

遠くを見るとさつきも見た大きな建物がいくつかそびえ立っていた。

それにしても、全然人がいないな。

こんな大きい建物があるんだから、誰がいるんじゃないかと思うんだが。

まあ、いないものをどうこう言ってもしょうがない。

そう思い、ふと花壇の端を見ると何かローファア的な物が揃えて置いてあった。

（なんだ？あれは）

近くで見てもやっぱりローファアだ。見るのは初めて（記憶がないので）だが、靴の一種であるというのは覚えている。

こじんまりとしたローファアで、多分女のものなんだろうな。

（……それにしても、なんでローファアだけがここに）

これを履いていたやつはどこだとキョロキョロ左右を見回す。

すると「ウーウー」と女の呻き声が聞こえた。

ジャンクション
……選択肢？

声の主を捜す。

その場からなるべく静かに立ち去る。

（つて、常識的に考えて捜すよな）

それにこの学園の生徒なら自分のことを何か知っているかもしれない。

言い訳のようにそう思いながら、俺は花壇の奥から響く声を辿って行く。

「誰がいるのか」

一応声を出しながらも思う。

（俺ってこんなに低い声だったのか？）

出す声すら聞き覚えのなく、違和感に顔を顰めて辺りを見渡す。せいぜいあるのは休憩用のベンチと貞子が出てきそうな古井戸と、井戸のそばにある大量の肥料ぐらい。

（？

肥料ってあんなところに放置しておくものなのか？）

あまり詳しいわけではないのだが、屋根もないところに置いておくものじゃないと思うのだが。

と思いながら凝視していると。

「た〜す〜け〜て〜」

深く、体の内を揺らすような女の子の声がどこからか聞こえる。

ま、まさか……！

井戸をさらに凝視する。

その俺の顔は恐怖と緊張で強張っているはずだ。

もしかして、あの井戸には貞子的な人がいるのか！？

白い衣装を着た髪の毛さばさの女が這いずって井戸を登るおなじみの光景が思い出される。

ってか、そんなのは覚えてるのかよ。変な記憶喪失だな。

ビビりながらも、怖いもの見たさというやつかゆっくり近寄る俺。ちなみに目的はほとんど忘れていた。

白い女性が飛び出すこともなく、井戸の前に立つことができた。そして、覗き込むとそこには。

「そこの誰か〜！ help me！」

ブレザーっぽい制服を着た少女が涙目でこっちに手を伸ばしていた。

……どうしてこんなところに女の子が。
なんでそうなった？

とにかくもう一度井戸を観察する。

深さはざっと三メートルぐらい。人一人が入るスペースはあるものの、それ以上は無理だろう。

普通は滑車付きで、水を引き上げる桶なんかがあると思うのだが、それらしき物もない。

（梯子かなんかがあれば登れるか？）

ロープでもいいのだが、近くに結びつけるものもないし、俺一人の力で人を引き上げられるだろうか。

男としてなんか悲しいが、人間の体重は結構なもので、それを引き上げるには俺には力がないと思う。

鍛えているなら大丈夫だろうが、俺の腕を見る限りそんな形跡はなく、むしろ細かった。

周りには何もなかったので、俺は井戸の中の女の子に話しかけた。

「梯子とかどっかにねーかな？」

「向こうのビニールハウスにあるよ」

井戸の向こうには確かに半透明なかまぼこ型のあれがいくつか並んでいた。

「ちょっと待ってろ」

女の子が頷いたのを見届けて、足に力を込めた。

というわけでダッシュ。

ダーッ。……猪木？

一番近いビニールハウスの中に入ると、そこには背の低い木が生い茂っていた。果樹園というやつだろうか。

さて、梯子梯子……と、

端のほうに畳まれて置いてあるのを発見した。

とりあえず手に取ってみる。

銀色のそれは今買ってきたように新しく、綺麗だった。まあ、特に気にすることでもないが。

どうやら広げると立てかけて使うようで長さ的には十分だと判断し、急いで井戸の前に戻る。

「おい。これを入れるから、気をつけてくれよ」

手元の梯子を見せながら言うと女の子が手を伸ばした。どうやら持ってくれるらしい。

広がり防止のチェーンは予め外しておいたので、半分を井戸の中に入れば立てかけられて、すぐにも登れるはずだ。

「登れるか？」

「うん。いけそう」

女の子が登ってくるのを見るのもどうかと思い、空を見上げる。
相も変わらず雲一つ無い快晴。

(……気に食わないな)

何が？と自分の思考に疑問を抱いた。

だが、それを真剣に考える前に肩を叩かれた。

「ありがとう。おかげで助かったわ」

肩で切りそろえられたショートカットのボーイッシュなその少女は軽快に笑う。

近くで見ると可愛いな。ちょっと泥で汚れているけど、そんなことはあまり気にならない。

なんて考えているのを気取られないように、どういたしましてと微笑む。

「えーっと、ちなみに授業中なんだけど、どうしてあなたはこんなところに？」

それで誰もいなかったのかと納得しながらも、

「君こそ、どうして井戸の中にいたの？」

すると少女は頬を朱に染めて、

「お、……落ちたの」

「……どうやって？」

さらに聞くと、少女はリンゴのように顔を真っ赤にして、

「……肥料をやるうとして台車で運んでいたら、……躓いて」

想像する。

目の前の少女が、一生懸命重い肥料を乗せた台車を押している。その娘が、たまたま石かなんかがあったんだろうな、それに躓いて、よろけた先には井戸というブラックホール。とどまろうと手を振りながら踏ん張ったけど、あえなく落下。俺に発見されるまでウーウー唸っていたと。

「……つぶ」

しまった。思わず吹いちゃった。

ギロつと少女の目が細くなり、

「笑ったわね？わたしが困っていた状況を想像して笑ったわね。わたしが井戸に落ちるまでの過程を想像して笑ったわね」

「すまん！これは耐えられんだろ？……ククク」

ダメだ。腹の皮がよじれそうだ。

「あなた意外とひどい人ね」

見た目はいい人そうなのか。なんだかそつちがありがたいのであんまり堪えない。

そう気付かないのか女の子は一人「……鋼鉄のハートを持つよね」と呟いていた。

多分、そんなものは俺には備わっていない。

ひとしきり笑った後、肥料をやるといふ彼女を手伝うことになった。もちろん謝罪の意も少しは混ざっている。

彼女は肥料を二袋乗せた台車を押して、俺は一袋両手で抱えていた。

……意外と重い。

「そつえば向こうにローファアが置いてあつたけど、それは君の物？」

「ええ。汚れてもいいようにスニーカーに履き代えたの」

（だから、置いてあつたのか。なるほどね。……あれ、俺、なんか忘れてないか）

疑問が氷解したところで、ようやく俺が記憶喪失であることを思い出した。

アホなのか？俺はアホなのか？

自分を責めても仕方ない。さつさとこの娘に俺を知ってるかどうか聞こう。

そう思い、口を開いたとき、

「そういえば見かけない顔だけどあなたは名前は？」

ああ。答え出ましたね。やっぱりね。知らないだろうとは思ってましたよ。うん。

「え」と、旋風律也っていうらしい」

「らしい？」

かわいらしく首を傾けながら少女は俺の瞳を見る。

「おかしな話だけど、記憶が無くてな。自分が誰で、ここがどこなのかサッパリわからない。

ああ、名前だけは生徒手帳でわかったんだけどな」

おかしなやつに思われただろうか？

記憶喪失なんてそうそうあるもんじゃないし、何言ってるの？とか言われたらちょっとショックだな。

「そう。よくあることよ。この世界では」

だが、少女はうんざりしたように顔を顰め言っただけだ。

「……ちょっと待て。記憶喪失なんてもんがよくあるのかよ？」

少女はさっきの軽快な笑みとは似ても似つかない無表情で告げる。

「ここにいるってことは、あなた、
死んだのよ」

それが、俺が死んだ後の世界にいたと知った瞬間だった。

EPISODE 02・After The Dead School

死んだ？俺が？

俺が足を止めたのと同時に少女も足を止める。

「おいおい。バカなこというなよ。俺はこの通り足も地に着いてる。痛覚だってある。意識もはつきりしてるし、君だって俺のことを見えるんだろうつ？」

「わたしだって死んでるんだもの。同じよ。それにこの世界は死んだ後の世界だって言ったでしょ？生前の世界とは違うの。ここにいる人はもともとこの世界にいた人か、死んでこっちに來た人だけよ。幽霊なんかじゃないの」

慣れた様子で彼女は流暢に説明した。

そのまま台車を押し始めたので、仕方なく付いていく。

「何なんだよつ。記憶はねえし、死んだって言われるし……」

「記憶喪失はよくある話だわ。事故とかだったら、頭をやられてるしね」

憎々しく吐き出した言葉を少女はしっかりと聞きとめていたらしく説明してくれた。

「理屈はわかるが、だが、それでもあんまりじゃないか？ここが死後の世界だって言うのは」

「なんなら試してみる？」

少女は振り返った。

「あなた、わたしを殴って」

比喻ではなく、頭痛がする。

眉間を抑えながら、ため息を吐く。

「あのな、何躊躇いもなく男に殴ってくれと頼んでんだよ。あんたMなのか？」

「さあ？わたし、そんな経験ないから」

意外だな。かわいいのに恋愛経験なしとは。

って、そっちが問題じゃなくて。

「だから、どうやら俺は頼まれたぐらいで女を殴れるような男じゃないようだからな。きっぱりお断りさせていただく」

「そう、残念ね」

「あんだ、Mだろうっ！！」

「冗談よ。……半分は」

「もう半分は本気か！！」

「いえ、人をからかうのは楽しいわという気持ちよ」

小悪魔的に笑う少女。最初の印象とは随分違う。

「そっぴゃ、あんた名前は？」

「わたし？」

「あんた以外に誰がいるのか？」

あたりを見渡す。さっき授業中とか言っていただけあって、見事に誰もいない。授業をサボったようで、ちよつと不良っぽい気分になる。

「この辺に誰がいるかもしれないわ……」

少女は隣の空間を人差し指で示した。

「あんたさっき幽霊はいないのと言ったじゃん！？」

時間にして1分前後でシリアスなセリフを否定された。

「そっぴゃ？」

しかも天然です。

「アホな子が……」

「失礼だわ。わたしはこれでも生徒会長なのよ」

スレンダーな胸（丁寧な表現）を張って、少女はどや顔をした。

「生徒会長」賢いとなる意味が分らん」

「それもそうか、だったらわたし、テストで100点取ったことがあります！」

無駄にこぶしを握り締めて彼女は言った。

「ああ、もういいから……」

とうかこの娘は、名前訊いただけで何わけわからん方向に話をシフトさせてるんだよ。

「で、その生徒会長様のお名前をお尋ねしているわけなんだが？」

「ああ、うん。わたしの名前は久野愛唯^{くのめい}。この学園の生徒会長を務めさせてもらっているわ」

そういつて久野は一礼した。

「ようこそシゴの学園へ」

「いや、ようこそじゃないだろ」

呆れて少女を見つめる。

「そつだよー。でもこれは決まりみたいなものだから、気にしないで？」

訳が分からん。それと、なんで疑問詞なんだよ。

もう面倒なのでツツコまないがな。

「それで、ここで俺はどうすればいいんだ？」

「そうね……」

顎に手を当て、久野は考え込む。

どこか楽しそうなの姿は死んだ人間のものとは思えなかった。

悲壮感がない。俺は記憶がないから、本当に死んだのかどうかも分からない。だが、死んだ人間ていうのはこんなに楽しそうに悩むものなのだろうか？

信用はできそうだが、彼女のその態度がますます俺の不信感を募らせていく。

結果として、俺は久野の言葉を全部真に受けることはできなかった。

俺が考えをまとめてみると、久野が右手を握り、左手の上をポンとたたいた。この動きはなんというのだろうか。

ああ、そっかー。なるほど。納得。等々、その様子が合いそうな言葉を例示してみるが、よくわからない。

「もうすぐお昼だから、食堂に行きましょう」

にっこにっこしながら彼女はそう言った。

「とりあえず、旋風くん」

バツとスカートを翻しながら、俺を指さす久野。

「花壇に肥料をやるのを手伝ってくれるかしら？」

そして、ポケットから取り出した軍手を俺に手渡す。

とりあえず臨時の仕事が決まったようだ。

俺はそれを受け取り、そして彼女の指示通りに花壇の世話をしばらくの間していた。

……ちなみに、俺はまだ自分の名前も暫定的に決めているだけである。

こんな調子で大丈夫なのかよ。

心中で俺は溜息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1025q/>

シゴガク-Dead After School-

2011年10月8日02時35分発行